

# Newsletter

# No.8

目次	P.1 巻頭言	国立精神・神経医療研究センター神経研究所 高坂新一 所長
	P.2-7	— エキスパートに聞く — 「現代型うつ病」 国立精神・神経医療研究センター 樋口輝彦 理事長
	P.8	財団からのお知らせ
		・財団主導型研究事業についてII 理事長 高橋清久
		・平成21年度 調査研究助成金採択者研究報告
		・平成22年度 研究集会等助成金採択者セミナー報告
	P.16	編集後記



高坂神経研究所長

東北地方を中心とした大地震で多くの方が亡くなられ、また家を失われ、避難生活を余儀なくされています。被災に遭われた方々に心から同情申し上げ、被災地の1日も早い回復を祈っています。以下の文は新年早々に脱稿したものです。訂正する時間もないので、そのまま掲載させていただきます。

私は年末年始を熱海か湯河原で過ごすことが多いのですが、今回も熱海かんぽの宿（安価に泊まれるのでお奨め）で温泉と読書三昧の穏やかな一時をゆったり過ごすことが出来ました。

今回楽しみにしていた書物は村上春樹の「1Q84」全3巻です。恥ずかしながら、これまで村上春樹の作品は余り興味がなかったのですが、3巻を読み終える頃にはすっかり村上ワールドに魅了されてしまいました。主人公の天吾と青豆、そしてリトルピープル、ふかえり、空気さなぎ、タマル、牛河、マザとドウタ等が織りなす幻想の1Q84年（猫の町）の世界、この摩訶不思議なストーリーをここで紹介するつもりはありませんが、私の興味を惹いたのが、小説の冒頭に描かれているタクシーのラジオから流れるヤナーチェックのシンフォニエッタという小交響曲でした。ヤナーチェックは19世紀後半から20世紀にかけて活躍したチェコ、モラヴィア地方出身のいわゆるローカル色のつよい作曲家です。このシンフォニエッタはヤナーチェック晩年の1926年に体育協会体育祭でのファンファーレとして作曲されたものですが、なぜ村上春

樹はこの曲を1Q84で用いたのでしょうか。こじつけようと思えば幾つかの因果関係がなくありません。例えば、ヤナーチェックはハプスブルグ帝国からのチェコの独立を熱望していましたし、主人公を1Q84の世界に引きずりこむ原点ともなった1960年代は過激派学生による闘争運動が激化した時代ということで共通点がありそうです。あるいはシンフォニエッタは金管楽器とティンパニーのあいまいな掛け合いで始まりますが、音楽には素人であった天吾が臨時のティンパニ奏者としてこの曲を演奏しても、そこそこの出来映えになるのではと村上春樹は考えたかも知れません。先日も研究所のある部長にこの疑問をぶつけてみました。彼の答えは単純明快でした。村上春樹は単にヤナーチェックが好きだったのだそうです。でも、本当にそうなのでしょうか。どなたか私が納得出来る回答をご存知の方は是非お教え下さい。

この様なたわいもない事を考えている間に三が日もあつという間に過ぎ去り、また現実の日々に引き戻されてしまいました。この現実の世界では、研究開発型独立行政法人であるにもかかわらず生命線である運営費交付金が大幅に削減されたり、臨床研究重視型であるべきはずの病院においても経営の効率化や利潤追求が求められるという悩み多き世界で、まるで自分が1Q84年の如き世界に迷いこんでしまったような感覚に捕われてしまうこともあります。青豆と天吾が一つの月が夜空に浮かぶ1984年に立ち戻ることが出来たように、国立精神・神経医療研究センターの使命を純粹に追求出来るような社会に一日も早く戻ることが出来るよう夢見ている今日この頃です。

（高坂新一 神経研究所長 2011年1月 記）